
とある科学の磁気单極《モノポール》

ぬぬぬぬぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の磁気単極モノポール

【Zマーク】

Z0692BA

【作者名】

ぬぬぬぬぬ

【あらすじ】

罪悪感を抱えながら生きている高校生、黒瀬和真。彼は周りの仲間たちとどのように、魔術と科学が入り乱れた世界を生きていくのか。科学的（物理的）におかしいところがあるかも知れませんが、スルーもしくはやんわりと指摘して頂ければ幸いです。

第一話　逃走

「あーもうひくしょー不幸すぎますーっ！」

「一番不幸なのは巻き添えくらつてるオレだーっでいうかお前との地球上の七十億分の一の確率で出会つてしまつたこと自体が不幸だ！」

「何だその現実的でありながらもロマンチックな不幸は！？っていうかそれ友達にかける言葉か？」

黒瀬和真は深夜の裏路地を走っていた。今日は七月十九日。夏休みに入らうという、かなりテンションの上がる日のはずなのだが

「いつオレがお前を友達と認めた？そんな覚えは無いんだが」「何だと！？ならこっちもお前なんて友達とは認めねえ！ただの他人」

「じゃあ僕関係ないんでこれで」

「待つて下さい！私上条当麻が間違つておりましたーだから戦前離脱はやめてください！」

この通りさつき偶然会つてしまつた友人と大規模な鬼ごっこをしている状況である。

叫び合つて体力を消耗しながら、二人は熱氣の漂う路地を走り続けた。程よく温まつた体を汗腺から分泌される体液がじつとりと濡らし、目の周りを拭いながらも和真は走る。そして鉄橋のうえにさしかかった時

「…………？」

ふと和真は何かに気づき、不信な顔をして後ろを振り返つた。明ら

かに追つ手の足音が聞こえない。当麻もそれに気がついたようで、

「おい和真、不良どもを撒いたんじゃないか？」

「ああ、確かに気配が消えたのは感じたが…………ばてるにしてもタイミングが揃いすぎじゃないか？これは…………？」

上条に次ぐ不幸体质の彼は、彼ならではの危機察知能力を働かせる。そして彼の予感は以外と鋭い。

「何やつてんのよアンタたち。不良を助けて善人気取りか、熱血教師ですか？」

逃げ場の無い鉄橋の上で、和真はうんざりとした表情を作る。そこには事の発端となつた少女が腕を組んで立ち、アスファルトにへたりこんだ当麻と和真を見下ろしていた。恐らく不良たちは彼女に始末されたことだろう。

「いや…………もしオレが熱血教師だつたら不良たちよりお前を更正させたい」

「和真に同意だ」

不良十数人を何事もないような顔で撃退する少女には、少し教育的指導が必要だと和真は思う。

「当麻、こいつだろ？ 最近お前にケンカ売つてくるっていうビリビリ中学生は」

「ん？ ああ、まあそなんだけど…………」

「おい嬢ちゃんクソガキ、自分の能力に自信があるのかは知らないが、こんな時間に外出歩いてんじやねえぞ？ そんなことをするから」

「ハア？ あんた誰に向かって言ってんのよ。私は不良の一人や一人

」

「お前の心配なんてしてねえよクソガキ^{クソガキ}が。また同じパターンで当麻が巻き込まれに行くのを心配してんだ」

お前は普通にどうでもいい、と言い捨てる和真。しかし和真是少女の禁句ワードをルビつきで言つたことには気づいていない。

「だあれがガキだつ！」

少女の叫びと共に撃ち出される槍状の電撃。それに和真是臆することなく反応し、唇をガリッ、と噛みながら防御の姿勢をとつた。そう、完璧な防御を。

「上条バリアーっ！」

「え！？俺？」

和真の目の前に配置された当麻にズドン！と電撃が命中する。少女も手加減はしているだろうが、当たつたら痛いとかそういうので済むレベルではないだろう。煙の中から出てくるのは当麻の気絶体か死体か……。

「…………それ結局俺に当たつた上に無事で済んでない状況だろーが

「…………で、やっぱリアンタは無傷なのね…………」

素晴らしい上条バリアー。当麻は運良く電撃を右手でガードできたらしく、立っている顔は余裕そうに見える。実際の心境はどうかはわからないが。

「…………つたく、盾にすんなら先に言えよな…………まあそんなヒマなかつたけどさ」

「悪い当麻。なんか反射的に」

「お前は反射的に俺を身代わりにするんですか！？」

いやあ悪い悪い、悪氣は無いんだと頭を搔く和真と、悪氣の無い方が怖いと顔を引きつらせる当麻。そしていまいち少女は空氣である。

「それで？アンタはどんな能力なわけ？」

「何が？電撃を消したのはオレじゃないんだが」

訝しげに聞く少女に、和真は二コリとしながら聞き返す。

「何が？じゃないわよ。アンタ今、手も使わずに上条じょうじょうを自分の方に引き寄せたじゃない。念動能力系の能力者？」

「はいはい、お前みたいなクソが七回ぐらいくガキにまで教える程たいした能力じゃないからな」

教えてくれない上に（クソクソクソクソクソクソクソ）ガキ扱いをする和真の態度を見て、少女の血圧が再上昇を始める。そして頭の周りにはバチバチと電撃が走り、

「そう……話す気がないなら無理矢理吐かせればいいってわけね？いいわよやつてやるわよ！」

ポケットから、ゲームセンターのコインを取り出す少女。それを見た和真は何かを思い出したようで、初めて彼女に意識を向ける。

「もしかして…………学園都市3位の超電磁砲レールガンか？常盤台の？」

「どうした和真、そいつって有名な奴なのか？」

「お前知らないのか？超電磁砲と言えば学園都市に七人しかいない超能力者だぞ？それに第3位ときたら、確かコインを使って」

「コインって言つて、今アイツが構えてるやつか？」

「マジで？と顔を強張らせながら和真はゆっくりと振り向く。一いつ笑う少女。また唇を噛む和真。

次の瞬間、オレンジ色の電撃が和真に襲いかかり、当麻はビームのように直進する電撃を見て息を飲んだ。和真は自分に向かってくる電撃を見、また面倒そうに顔をしかめそこから一步も動こうとしない。当麻はすぐさま駆け出そうとするがどう見ても間に合わない。直撃する、と当麻は思った。

しかし

「あれ？え？」

電撃は和真の少し手前で失速すると、そのまま消失してしまった。和真は面倒そうに飛んできたコインを掴む。空気摩擦で少々熱されたコインだ。もはや弾であるコインは手で掴める程減速していた。安心した表情を見せる当麻と、ふーっ、と息を吐く和真。そして

「…………何で？^{レールガン}超電磁砲は50メートルくらいには飛ぶはずなのに……」

目の前の光景に目を見張る少女。

レールガンの欠点の元になる、すぐに熔ける弾も和真の右手に収まっている。なぜコインが熔けきつたわけじゃないのにレールガンは消えてしまったのか？

納得のいかない少女に、和真は首の骨を「キキキキ」と鳴らしながら説

明を始める。

「うーん、と。お前のそのレールガンってのは平たく言えば電磁誘導、つまりローレンツ力を利用して打ち出されるモノだ。だからその磁力を止めてやればレールガンは撃てない、と思つたんだが……」

「……」

和真は手に持つたコインを見つめる。

「完全には磁力は抑えられなかつたらしくな。まあ急に撃つもんだから、ちょっと反応が遅れたっぽい」

「…………磁力を抑えるつてどうやって つてまさか？」

「まあお前は磁力線とかが見えるんだろ？ならオレがさつき当麻を磁力で引き寄せたのも見えたはずだ。これで納得か？」

しかし少女はまだ納得していないようで和真を睨み付け、当の本人はまだ手のひらに載つているコイン凝視している。よく見ると、空気摩擦によつて熱せられたコインは少し煙を発していた。

「…………仮にアンタが磁力を操れる能力を持つても、上条もアンタも鉄や磁石じゃないのよ？どうやってそんなこと…………」

「ああ違う違う。確かにオレは磁力を操れるけど 」

いい加減熱つ！と和真はコインを投げ捨てる。

「モノに磁場を与えることもできるんだな、コレが」

呆然とする少女に、氷持つてない？と涙目で尋ねる和真。少女の好敵手が一人増えた瞬間だった。

第一話　逃走（後書き）

さて、主人公の能力。

あまり詳しくはありませんが、磁力を作るということは電荷の動きを作ること？だから一種の発電能力？とも思いましたが、美琴のようなビリビリは出せないので磁力オンリー野郎と考えて頂ければ。

第一話 遭遇

「はあ～…………暑い…………」

和真は部屋の中で悶えていた。暑い、というのは昨日の火傷ではない。部屋が、である。

「もしかして昨日の雷で家電逝つちましたか？」

呼びかけに反応を示さない冷蔵庫や電子レンジなど、やじりじゅうの家電に目を向ける和真。あのビリビリ中学生余ったらぶつ殺すとか思っていると、ふと自分の下の部屋の住人のことを思い出した。昨日、共に逃避行を繰り広げた友人だ。

「オレはレベル4だし金はあるけど…………当麻は大丈夫かあ？」

ちょっとと後で見に行つてみよつ、と和真は同じ不幸仲間の当麻を心配する。

「とりあえず暑いから窓開けるか」

窓を開けてベランダに出る和真。目の前には東京都の西半分の広さを有する学園都市の街並みが広がり、とにかくひたに風車が並んでいる。

「（今日もいい天気だな…………）」

目の前に広がる八階からの景色に和真是起きの目を細め、何となく壁に手をかけた。次の瞬間。

いきなり壁が崩壊した。勿論壁に手をかけていた和真は落下するしかない。八階のベランダから。

「ちょ、ちょい待てつて！これは不幸つてレベルじゃない！つていうかまだこの小説始まつたばつかなのにつ！？」

ハ階なんて高さから人が落ちたら、まず死は免れない。この状況で和真に残された手段はただ一つ。

「（当麻^{ななかい}の部屋のベランダに乗り移るしかねえつ！）」

勇気を出して一、二、三ーと実際は一秒も無い中和真は何とか七階ベランダの外壁に手をかける。軽く走馬灯を見た和真の目は涙目だ。この経験は誰かに自慢できそひ、と思いながらも胸に手をあて生を実感する。

「…………悪いな当麻。朝から騒がしくて つ！？」

七階ベランダに乗り込んだ和真が見たのは、不幸そうな顔をした当麻だった。

そして隣には全裸の銀髪少女。

「…………当麻が遂にやつたか……」

「だー待て待て、俺は少女誘拐犯じやない！てか『遂に』つて何！やる要素はあると思つてたんですか！」

必死の弁明を始める当麻。その横で涙目になつていた銀髪少女は、

一気に当麻の頭に噛みついた。

「当麻、オレは信じてるぞ……？お前が心を入れ替えて出所してくれるのを……」

「刑務所入りは決定事項ーー？…………つてもつ、不幸だあーー！」

そこから和真を引き留めようとする当麻と、逃げる和真の十分にわたらぬ鬼ごっこが始まった。

「んで？話をまとめると…………」

この声は結局捕まつて話を聞かされた和真。話によると当麻が朝起きた時、ベランダに一人の少女が干してあつたらしい。純白の修道服に身を包んだシスターだ。因みにその少女はまだ当麻の頭に食いついている。

「そして事情を聞いたとこな…………」

彼女は十万三千冊の魔道書を持つていて、それを狙う魔術結社から逃げていた際背中を撃たれ、当麻のベランダに引っ掛けっていたという。かなりぶつ飛んだ話だ。

「そして魔術があるかないかの論争をするついでに……」

当麻の右手が彼女の修道服を破壊し、

「そのタイミングでオレが落ちてきた、と」

むう、と考え込む和真。三人の間に沈黙が流れる。そして和真はグツと拳を握りしめると

「死ね当麻あつ！」

「何ゆえつー？」

当麻に殴りかかった。

「何でお前はそんなラブコメイベントがホイホイ発生すんだつ！殺す！今日という今日はこのフラグメーカー野郎をぶっ殺す！」

「怒るどこはそこかよつー！」

嫉妬に燃えた和真の拳が当麻に襲いかかる。もともと身体能力が同じくらいなので、そこから一分にわたる決闘に決着はつかなかつた。

そして

「……つたく。お前は本当に不幸以外のモノも引き寄せよな」

舌打ちをしながら、和真はインテックスと名乗る少女を見る。当麻のこういうところは昔からわかってるけどな…………と、和真是諦め

の姿勢だ。

「…………お前はコイツの言つてること信じんのか？」

「むー、まだ信じない！魔術はあるんだって！」

当麻はインデックスのことが信じられないよつで、和真に少し困惑した顔で聞く。確かにこの科学の発展した学園都市でいきなり魔術やら何やらを信じろとこつ方が無理な話だろう。案の定和真も、

「そんな話信じられるわけがないだろ。だが、お前の右手がその

……なんだつけ

「『歩く教会』だよ」

「そつそつ、『歩く教会』を壊したんだろ？ならこの子が言つてる

『魔術』って奴にも少しほは信憑性が出てくるんじゃないか？」

「…………まあなあ」

んー、と頭を抱える当麻を見て、和真是一ヶと笑みを浮かべる。そして

「じゃあオレは自分の部屋に帰るぞ。よく考えたらお前補習があるもんな。その子の面倒、ちゃんと見てやれよ？」

「え？…………つておい！さつきはあんなに怒つてたクセに、結局上条さんに一任ですか！？不幸は一人で分かち合おうー？」

「オレはそんなマイナスな関係は築きたくない

当麻の制止を聞かずに、和真は走つてドアを開け逃げて行く。厄介事は当麻に任せた、といった格好である。

「へえー、君とあの人との関係はあんなにドライなんだね？何かか

つにいいかも」

「いや、いつもはもう少し協力的な奴なんだけど……何か用事で
もあんのか?」

残された当麻は少し疑問な表情をしていた。

「さて、まず冷蔵庫がやられちまつてゐるから食い物買いにいかない
と……」

着替えをしながら和真は呟く。しかし頭の中に浮かんでいたのは、
食べ物ではなくさつきの銀髪少女だった。何やら事情を抱えている
顔・・・あの笑顔の裏に何かありそうだよなあ。と和真は思う。
別に気にならないわけではない。だが・・・あの子はなんだか
自分には救えない気がした。

ただの言い訳かもしれない。厄介事から逃げたいだけなのかもしれ
ない。でも気がつけば自分はこの部屋に戻ってきていた。

「……当麻がいるし大丈夫だろ」

それでも当麻ならあの子を悪いよひには絶対しない。そんな確信め

いたモノはあつた。

知り合つてまだ数ヶ月だが、それが和真が当麻に抱いている信頼だつた。

きっと助けてやれるだろう。和真是自分より当麻を信じていた。

「…………さて、行きますか　　ってうわつ！」

考え事をしながら行動していたのが悪かつたのか、ドアの前に落ちているバナナの皮に和真是気づくことができなかつた。次に起きた出来事は言つまでもない。

「バナナって…………いつの、ネタ…………だ」

後頭部を強打したようで意識が遠のく。そしてそれから五分間のびていたのは、正直言えばいつものことだつた。

「何だ……？何コレ…………」

和真是近くのコンビニに来ていた。眠気が抜けないからコーヒーでも飲もうかな、なんて考えて飲み物売り場まで来てみたのだが。

「（何でいつも飲んでる種類のやつだけ売り切れなんだ？え、コレ店員の嫌がらせじゃないよな？）の前雑誌読むだけ読んで何も買わないで帰つたこと怒つてんの？」

出かけて早々にちょっとした不幸に遭遇する和真。朝から数えてもう三回目の不幸である。今回も和真は数時間前に来た少年が大人買いをしていったことなど知る由もない。仕方がないので他の種類で代用する。

そうして店を出て口に缶をくわえながら歩いていると、今度は顔見知りとの遭遇である。今日は四連続不幸か？と和真は早くもくじけそうになつた。

「あつー！アンタは昨日のー！」
「昨日のビリビリ中学生か。今日も元気ビリビリだな。とにかくうちの家電どうしてくれんだ？」
「元気いっぱいみたいに言つんじゃないわよー！アタシなは御坂美琴つていう立派な名前があるんだからー！」
「悪いなビリー。どうひでうちの家電どうしてくれんだ？」
「こん……のつー！」

どこか小馬鹿にするような和真の態度に美琴の血圧は上がりっぱなし。もう髪の周りにパチパチと音を立てているのは言つまでもない。ちなみに和真もちゃんとスルーされて額には青筋が見える。

「ちよつとお姉様？この私を差し置いて、ビリーの殿方と話していらっしゃるのですか？」

「ああ、黒子。こいつよ、さつき話したムカつく奴」

「へ？ああ、さつき話していた殿方ですの？お姉様のレールガンを

防ぎきつたという

「何だ？今日は連れがいるのか？」

和真は美琴の数メートル後ろにいる少女を見ようと首を伸ばした。そして黒子と呼ばれた少女は和真の顔を見ようと体の位置を動かす。そして両者とも、相手の顔を見た途端動きがピタリと止まった。

「黒瀬…………和真…………？」

「ああ、お前か…………久し振りだな、黒子」

その顔は、ただの古馴染みに会った表情にしては哀しそうだった。

「（何？何よこの空氣！ギッスギッスじゃない！）」

美琴はかなり居心地が悪かった。なぜなら

「…………」「…………」

和真と黒子が、お互いの顔を合わせた途端、ぶすっと黙りこくつてしまつたからだ。いや、黙つただけなら良いが、和真はともかく黒子の顔にはありありと嫌悪がうかんでいるのである。重力が何倍にもなつたような空氣の重さ。美琴はもうギブアップを宣言したくな

るまで追い詰められていた。

「（何よ、知り合いなのかと思つた瞬間にこれって……いつたい
どうこう仲なわけ？）」

黙つていても仕方がない、と美琴は何か喋つてみようとする。

「あの
「今まで……何をしていましたの？」
「ん？」

口を開いた途端、黒子のイライラとした声に遮られた。これはアタシが口を出す場面じゃないかな、と美琴は黙りこむことにする。

「今まで何をしていたのか、と聞いているんですのー」
「別に。普通に学校通つて普通に生活して 普通に生きてきただけ」
「なぜ連絡の一つも入れないんですのー私や初春がどれだけ心配したか……！」

初春さんも知り合いなんだ……と、美琴は以外に思う。初春さんはなんかこういう人とかと接点無さそうだけど、と。

「連絡無しは悪かった。でもオレはこの通り元気だ。お前も相変わらず元気そうだし。……初春も元気か？」

薄っぺらい微笑を浮かべて和真は答える。

「ええ、元気ですか？ もっとも、アナタが半年前にいなくなつて

かりしじめいへせふや“わい”でこましたけどね…………」

お前のせいだと言わんばかりに和真を睨み付ける黒子。

「そりが…………でも今は元気なんだろ？ならいい。充分だ」「あの…………『いなくなつた』ってどうこいつ……」

美琴はビックリしながらも、どうしても好奇心を押さえられずに聞いた。ここ最近ずっと一緒に過ごしてきの黒子も、この磁力使いについては一言も触れることはなかつた。そんな人に好奇心が湧くのは、少々仕方の無いことかもしれない。

黒子は少し答えにくそうな顔をし、若干顔をしかめながら口を開いた。

「Jの方は…………黒瀬は、私たちと同じ風紀委員でした。半年前にいきなり姿を消すまでは…………」

第三話 再戦

「ジャッジメント 風紀委員だつた?」^{ジャッジメント}「いつが?」

「ええ、つい半年前まで。そして所属は一七七支部……」

「それって、アンタたちと同じ……」

美琴は驚きを隠せなかつた。ジャッジメントというものは、本来入るのにもかなり長い期間を要する。目の前のやる気の無い男が、そんな努力をしてまで他人を助けるような人間には見えなかつたのだ。そして何より気になつたのが、

「それで途中でやめちゃつたつて、どういう……」

美琴は詳しくは知らなかつたが、入るのに長い期間がいる風紀委員から、そう簡単に抜けられるものだとあまり考えられなかつたのだ。何か特別な理由があつたんぢや……? そう勘ぐる美琴に、和真は無表情で言つ。

「お前には関係の無い話だ。知る必要も無いし、知つて欲しくもない」

勘ぐる必要はないぞ、と言い残し和真は回れ右をして帰ろうとする。しかしその動きを黒子は見逃さない。

「待ちなさい、初春に顔も出さずに帰るつもりですか?」

「…………ああ」

「それはなぜ?」

美琴は和真の変貌ぶりにも驚いていた。昨日交戦した彼は冷静では

あつたものの、もつと明るくひょうきんな人物に見えた。しかし今
の彼は

「今更どの面下げて会いに行けるんだ?お前が言つた通りオレは半年間音信不通だつた。もうお前らには会いたくなかった。資料が支部に残つてたから住所も変えたし、学校の帰りなんかでも必ずお前らには会わないよう注意を払つた。そんなことする奴がどんな顔して会いに行くんだ?」

今の彼の顔には自嘲的な笑みか悲しそうな微笑しか表れていない。自分の不幸を笑うような……いや、自分を幸せを消してしまおうとしているかのような顔だつた。対する黒子は歯をギリギリと噛みしめ、今にも和真にとつかみそうな顔をしている。

「それなら、無理矢理初春にも会つてもいいままでですの…………!」

次の瞬間、黒子の姿は一瞬で消えていた。彼女の空間移動テレポートーションを使つたのだろう。行き先は初春のいる風紀委員一七七支部。美琴に声もかけずに消えたあたり彼女も相当テンパつているに違いない。

「ビリー、オレは帰るぞ。黒子が初春連れて帰つてくるのも時間の問題だ。幸い一七七支部はこつから結構遠いけど

「何で逃げるのよ?会えばいいじゃない」

「残念ながらそういうわけにもいかない。オレもう決め…………つて、何の真似だ?」

美琴は和真の腕を掴んでいた。勿論和真を引き留める為である。正直美琴は自分が正しいことをしているのかわからなかつたが、それ

でもやさしさの黒子の表情を見て見過「」す」とはできなかつた。

「アンタは逃げてどうすんのよ？一生あの子たちを避け続けるつもり？そんなことを続けて ってあれ？」

美琴の体は見えない力に押されるように、和真から引き離された。美琴が和真の顔を凝視すると、噛んだ口の端からまたも血が流れている。

「昨日と同じ…………磁力ね」

「なんで黒子がオレを直接連れて行かなかつたかわからないのか？レベルは5でも初戦はガキだな」

「く……昨日からちよいちよいバカにしてくれるわね。わかつたわ。昨日の再戦も兼ねて勝負よ！私はアンタを引き留める！アンタは逃げるなり私を倒すなり好きにしなさい！」

言つなり美琴の頭から電撃が発せられる。対して和真は脱兎の「」とく走り出し、逃走を開始した。

「待ちなさいっ！ちょこまか逃げんなっ！」

「いやいや、逃げないと死ぬからな？電撃が直撃しても動いてられるボテンシャルなんてないし」

自分より前方にある置物に電撃が直撃したのを見て和真はため息をつく。これは逃げ切れそうにないなあ、と呴いて近くの河原に駆け下りた。障害物の少ない広場に出る。それは逃げることではなく戦うこと意味していた。

「何？戦う気になつたワケ？」

「とつと倒してとつと帰る。そうすることに決めたんだよ」「ふん。この私に向かつて大きい口きてくれるじゃない。レベル

5でもないアンタがね」

「レベル5が何だ？ 4と一つしか変わらんだろう」「

美琴が放つ電撃を右へ左へかわしながら和真は余裕な顔で喋る。本來電撃とは見てから避けられる速さではないが、和真是美琴の目線や体の動きから予測して軽々とかわす。その余裕の態度が美琴を更に挑発していることに美琴は気づいていない。

「そんな直線的な攻撃、狙いがわかりやすくてありがたいな。……時に御坂、ヒロセ磁氣單極子モノポールって知ってるか？」

「はあ？ えっと（ドオンー）……確かに（ドオンー）……」

「…………待てる暇がないからオレから説明するか。簡単に言えば片方の極だけを持つ仮想上の粒子だ。まだ現実には見つかっていないんだが……それをもし作れたらどうする？」

「そんなの（ドオンー）…………知らないわよ！（ドオンー）」「

「そんなにドンドン電撃撃たなくともよくないか？会話の途中で……」

「……」

和真は後ろに下がろうとして橋の柱にぶつかる。もう逃げ場は無いわよ？と勝ち誇った顔の美琴。しかし和真是まだ余裕な顔である。

「じゃあ質問を変えよう。もしあ前の体と周りにある全ての石を違う極にして、磁力を持たせねばどうなると思つ？」

「へー？」

周りの小石がカタカタと動き始めた。これが何を意味しているのか美琴は直感的に理解する。冷や汗がツルリと頬を伝った。

「正解？もつ言わなくともわかるだろ」

周りの小石が一斉に美琴に襲いかかった。手加減でもしているのか
石のスピードはあまり無いが、体中に石がくっついていては身動き
はとれなくなるだろう。しかし美琴はまだ諦めていない。すぐに磁
場を

「ああ、言つておくがお前が磁力を変化させようとしても無駄だ。
もともと磁力専門のオレと電撃専門のお前どじやレベルを補つて余
りある差があるんでな。昨日とは逆だ。それに……」

和真は、足をとられて倒れ込んだ美琴を見下して言った。

「オレをただのレベル4だと思つなよ?」

第三話 再戦（後書き）

磁気単極子はもっと難しいものなみたいですが、この作品ではあくまで片方の極のを持った物体、ということにしてます。

主人公設定（前書き）

今までに出ただいたいの設定です。でてない部分もありますが・・・。

主人公設定

黒瀬和真
くろせかずま

身長174? 体重54? 性別 男

当麻と同じ学校に通う高校生。当麻との付き合いは高校入学時から。当麻の上の部屋に住んでおり、そこまでたいした友好関係ではないが一応は友達と呼べるレベル。当麻に対しても少々尊敬のような感情を抱いており、自分が行動する時の見本などにしている節がある。また、当麻にも劣らない不幸体質であり可哀想な生活を日々送っている。元風紀委員ジャッジメントでもあり、黒子や初春とは結構古い仲の様子。しかし半年前にいきなり黒子たちの前から姿を消し、今もずっと接触を避け続いている。また、付き合いは長いものの黒子とは昔から馬が合わず基本的に仲は悪い。

能力

磁力操作 レベル4
マグネティック・カーブ

磁力を支配する能力。もともと磁力を持つていないもの同士に磁力を発生させて引きつけ合わせたり、自分と相手に発生させ反発させたりと凡用性が高い。レベル5に近い強さの能力だが、自分自身に磁力を作れずレベル4と判定されている。本人自覚で、能力発動時に唇を噛む癖がある。

磁気単極子
モノポール

物体に片方の極だけの磁力を発生させる。使い方はいろいろある
が後は本編で。

主人公設定（後書き）

主人公は基本的に、

能力の強さは一方通行に及ばず。

ケンカのつよさ
身体能力は土御門に及ばず。

心の強さ（正義感）は当麻に及ばず。

負けん気は美琴に及ばず。

という何一つ突出していない微妙なお人です。

第四話 決断

美琴は信じられなかつた。今の勝負はどう考へても自分の負けだ。
超電磁砲も昨日防がれたらし、磁力を使つても力で捩じ伏せられた。
いくら相性が悪いとしても…………ここまで完敗は初めてだつた。
最近勝負を挑んでいたツンツン頭の少年との戦いを含めてもだ。

解せない顔をしてるな、と和真は立つたまま、身動きのとれない美琴に言葉をかける。

「『なぜレベル5の自分がレベル4に負けたか?』だろ?お前の疑問は」
「…………」

「本来オレの能力つてのは、レベル5に認定されてもおかしくない数値なんだよな」

「…………へ?」

和真の言葉に美琴はキヨトンとする。しかし美琴も思つていた。

確かに和真の能力はもうレベル4のそれを凌駕している。

磁気单極子など普通の磁力使いにはできると思わないし、現に美琴以上の力で和真は磁力を操つてているのだ。レベル4にしては強すぎる。

「それじゃあ何でアンタはレベル5になつてないのよ?能力判定の受けそこない?」

「いやー、自分の弱点を教えるみたいで気が進まないが……。オレはな、自分自身に磁場を作れないんだよ

「自分自身?」

「ああ。どうもそれが能力判定の時の足枷になつてゐみたいでな。どれだけ頑張つてもレベルが上がらん。……まあレベル5になつたところでどうする、とも思うけどな」

やや自嘲的にな笑顔で自分の能力について語る和真。美琴はその姿に何かを感じたが、何が引っ掛かったかはわからなかつた。それより気になることがある。

「昨日のあれは何よ?あのバカを引き寄せたのは?」

ああアレね、と和真是美琴の疑問を理解する。自分の体に磁場をつくれないのに、なぜ当麻を自分の方へ引き寄せることができたのか、だ。

「ありやあ簡単だよ。例えは身につけている物、服とかアクセサリーとか。そういうモンをしつかり固定して磁場を作れば、体に作つたのと同じことだろ?」

「じゃあ何で自分の体には作れないわけ?いかにも最初にやりそつなことじゃない。能力を手に入れた時とか」

「いやいや、昔はできてたんだがな。今はもうサッパリだ」

何で?と問いかける美琴に和真是歩き出しながら言つ。もう黒子が帰つてくる時間だと見当をつけたらしい。

「んー…………精神的外傷かな?」
トライアクト

磁力は五分ぐらいしたら消してやる、と言い残して和真はその場を去った。

「ちょっとー白井さん、いきなりどうしたんですか？」

「『いらっしゃへんに』……黒瀬…………が…………つ！」

和真が去ってちょうど五分後、初春を伴つた黒子が先ほどの場所に戻ってきた。息は切れ、もう既に肩で息をしている体で周りを見渡す。しかし辺りには、和真の姿どころか美琴の姿すら見つからない。

「お姉様まで…………」これは…………一体？」

「あ、白井さん。あれ…………」

初春が指を指したその先には、地面がえぐられたような戦いの後。間違いない、と黒子は思った。ここでお姉様が電撃を放つた。そう思った時、その背後から、

「「」めん黒子…………。あいつ逃がしちゃった

美琴がよれよれの体で立ち、黒子たちの方へ歩いてきた。

「お姉様!…………もしかしてあの男と戦闘を?」

「うん。これ以上ない完敗。しまいには手加減までされる始末よ? 情けないわね…………」

「そうですの…………お怪我はありませんの?」

うん、ともう一度答える美琴に、黒子はホッと安堵する。安堵すると共に、美琴の敗北にあまり驚いていない自分に気がついた。あの腹の立つ男は昔から得体の知れない強さを持っている…………。黒子は和真とは馬が合わず、嫌いな人間の一人であつたが彼の強さは認めていた。

「み、御坂さんが負けたってどういうことですか!?.それに白井さん、やつきから何をそう焦つてるんです?」

いまいち状況が飲み込めない初春が、黒子に説明をしてくださいと詰め寄る。黒子は苦い表情をした。

「初春……「」に黒瀬が…………黒瀬和真が…………

「えつ…………」

全ての感情が吹き飛んだ初春の頭には、笑つてこつちを見る少年の姿が鮮明に写し出されていた。

「なんでこんな夏休み初日なんて日に会つちまうんだか・・・」

和真は公園のベンチで一人項垂れていた。

正直心臓が飛び出そうになつた、と言うより他にない。黒子と会つた時だ。思えば御坂との会話はちょっと現実逃避だつたんだな、と和真は自分の心理状態を冷静に分析する。

予想通りと言つては何だが、黒子や初春は心配してくれていたようだつた。それでも黒子の顔を見た途端には、すまなく思うとともに急に風紀委員ジャッジメントだった頃の記憶が甦つた。

簡単な仕事ばかりに辟易していた時。

初めて事件を解決して狂喜した時。

黒子と口論をしている間に犯人に逃げられた時。

その後の初春の毒舌に少し涙した時。

思えば全てが昔のことで、全てが素晴らしいしかった。

本当は戻りたい。**風紀委員**ジャッジメントにはもうなれなくとも、せめてあの二人のいる所へ帰りたい。

でも

「無理な話か

戻るわけにはいかない。自分はもうそいついた幸せ…………そつ、『幸せ』は諦めたのだから。それに

「あいつらを巻き込むなんて絶対にお断りだ

そう決めた。

半年前に。

第五話 薄幸（前書き）

今回は少し短め

第五話 薄幸

「（はあー、ベンチに座つてちょっとブルーになつてたら、結構時間食つちまつたな……）」

陽も傾いてきた頃、和真は五日分ほどの食料を持ちながらマンションに向かっていた。あれから結局黒子たちに会つことはなかつたが、心を整理するのに時間を使つてしまつたのだ。

「やつぱつまだ戻りたいと思つてんのか…………」

夏休み初日のせいか、この学園都市の生徒たちの姿は見つからない。人気の無い道を歩きながら、何気なく住人のものと思われる自転車を虚しい気持ちで見ていた。

次の瞬間。

ちよつと自転車と自転車の間に着々するよつに当麻が落ちてきた。

「当麻、何してんだ？」

「か、和真か！？大変だ！ま、魔術師が……」

「魔術師い？」

暑さで頭がやられたか、と推測する和真。しかし必死に何かを差す当麻の指の方を見ると、そこには信じられない光景があつた。

人形の炎が暴れている。

「な、なななな何だありや？」

「だから魔術だつて言つてんだろ！インデックスを狙つて来たんだ！」

「ツ！」

必死に頭の中を整理する。和真は思つ。いつも時はいちいち無駄な事を考えて無駄だ。簡単に、わかりやすく捉えよつ。簡単に簡単に！

「要するになんだ、魔術師を倒せばいいってこと？」「飲み込み早……」

「ルーン？」

「ああ、アレはルーン文字を周りに刻むことで発動する魔術らしい。その証拠に、マンションからあの化け物は出てこれでないだろ？」

うーん、と和真が唸る。なぜ当麻がそんなことを知つているかなんて尋ねない。気にしない方が行動をしやすいからだ。当麻は相当気が立つていてるのか、こうして話している間にも飛び出して行きそうな勢いだ。

「そのルーンの場所はわかるか？」

「ああ、つていうか建物全体に何万枚と貼られてる。サボつてののかわからんねえけど全部紙だ」

「ん、そうか。ところで、お前の右手はアレには効くのか？」

「ああ、消すまでとはいかないけど防ぐことくらいはできる」

目を瞑つて再考する和真。一秒後、唇を噛む。準備完了。

「オレは紙を全部剥がすから、お前はその魔術師のトコ行つてろ。
あつちは一人なんだろ?」

「…………和真、信じていいいのか?」

「任せろ」

和真はやつぱり一目散にマンションに近づき、朝と同じ要領で二階へ上がる。当麻は少し心配そうに和真を見たが、こには信用するしかないと一気に階段を駆け上る。

「建物全体と紙全てに同極の磁場を……」

目を閉じて演算に集中する和真。炎の巨人の姿をちらりと確認するが、オートに設定されているのか当麻の方にかかりつきだ。しかし当麻に危険がふりかかる分、早くしないと危ない状況に変わりはない。

「（くそ…………いかんせん数が多い…………もつ少しー）」

非常用階段で何階かマンションを上に登りながら演算を続ける。見たところ当麻の言つとおり何万もあるが、紙を剥がすくらいの磁力だつたら作るのに苦はない。一枚の紙に磁場を作る時間はほんの一瞬だ。そして和真が六階に達した時

「よし！演算終了。行けっ！」

発動と同時に紙が全てマンションから同時に離れた。建物から離れたたくさんの紙は、風に吹かれてマンションから遠ざかっていく。

「これで大丈夫なんだろうか……」と和真は周りの様子を見回してみる。

『…………ノケン…………ス！』

この声は上の階か、と和真は察知して、すぐさま階段でもう一階上に上がる。

そこには

大柄な魔術師（らしき）人物と上条当麻がいた。

「イノケンティウス！イノケンティウス！」

赤髪で身長2メートルはありそうな魔術師は必死で自分のしもべの名前を呼び続ける。しかしもうルーンの紙はほとんど剥がされてしまったのだ。剥がされた紙は風に煽られ閑散とした街の中を飛び回っている。

「お前の仕業か！いつたい何をした！」

魔術師ことスタイルは、当麻の後ろからスタスタと歩いて来る和真に田を剥いて言った。和真是手摺に手をかけながら答える。

「別にたいしたことはしてねえよ。あんなペラい紙切れなんて何万枚あろうが飛ばすのに造作はない。お前がどれだけがんばろうとつて熱つ！熱いこれ！」

「あー、悪い。そこでさつきちょっと戦つたんだった」

「何かまだ五話なのにまた同じパターンで火傷してない？…ちょっとぐらい格好つけさせろや！主人公が格好良くないと人気でねえぞ！」

一部が溶けるほど熱せられた手摺を触つてしまい悶える和真。彼は当麻ではないので、格好つけることは許されないので。というより今は少しシリアスな場面であるはずなのが。

「くつそ……まあいい。この火傷の分もあわせてキッチリお返しさせてもらおうじゃないか魔術師？」
「それは完全な逆恨みだと上条さんは思つんですが・・・」
「く……そ……っ！」

ゆっくりと歩いてスタイルに近づく一人。その後、二つの打撲音がマンションに響いた。

しかし和真はまだ知らない。その魔術師の背後にある手負いの少女の存在を。

彼はまだ知らない。自身の精神的外傷に深く直結するものがそこにあることを。

第六話 慢病

「おい、そいつ早く手当しないとやばいぞ！出血が多すぎる…」

和真と当麻は、血だらけのインテックスを連れて路地裏に来ていた。背中には魔術師によつて切られた深い傷がある。すぐにでも病院に連れて行きたいところだが、彼女はこの都市の住人ではないので部外者が病院にかかると情報が漏れやすい。情報が漏れれば、またさつきのような『魔術師』が襲いかかってくる危険もある。さっきの炎使いも十分に危険だが、それ以上に危険な敵がこの少女を狙っているかもしれないのだ。

「おいインテックス！お前の持つてる十万三千冊の魔道書に、この傷を治すような魔術はねえのかよ！」

残つている可能性に当麻が叫ぶ。もはやそれ以外にすがる他はないのだ。

「…………ある、けど。君には多分無理……。私が術式を教えたとしても、君の、能力が邪魔をする…………」

「そ、んな……」

「当麻の右手が問題なら、オレがやるのはだめなのか？」

和真の問いかけに、インテックスはゆっくりと首を振る。

「この人の右手が邪魔をするわけじゃないの……。魔術っていうのは、君達みたいに才能ある人たちが使う為にあるものじゃないから……。君たちと違つて才能のない……超能力が使えない人じやないといと魔術を使うことはできないんだよ……」

「なつ……」

要するに、この学園都市で能力開発をうけた全ての生徒はもう能力者として認識され、魔術を使うことはできないらしい。たとえレベルが〇であろうとも、能力開発を受けた時点で脳の回路が変わってしまう。つまりこの学園都市にこの子を救える生徒はいない…………？ そう考えた和真の頭に何かが引っかかった。この街の生徒なら。つまり、

「…………あんまり迷惑はかけたくないが、行くしかないか」

「あの先生、もうこの時間で寝てるなんて言わねえよな…………」

あの人生活態度がオッサンだから大丈夫だよ、と和真は笑おうとしたが、インデックスの刀傷が目に入り吐き気をこらえるのに精一杯になつた。

青髪ピアスから小萌先生の住所を聞き出し、少し別の疑惑を抱えながら古いアパートに向かつた。和真もだいたいの道は（なぜか）わかつていたし、駐車場には先生特有の特注自動車がある。すこし錆びている階段を駆け上がつて一番奥の部屋のチャイムを鳴らすも、

なかなか先生がでない。しかもそれにいらついて同時にドアを蹴つた当麻と和真の足の親指から、なにやら不吉な音が聞こえてくる始末だ。さすがは不幸の二人組である。

「はいはいはーい。対新聞屋さん用にドアだけは頑丈なんですよー。今開けちゃいますよー？」

扉を開けて姿を現したのは見た目は子供で頭脳は大人。学園都市の都市伝説にまでされていて、和真と当麻の担任でもある小萌先生だ。ウサギ100%のパジャマがさらに子供っぽさを演出している」とにこの人は気づいているんだろうか、と和真は思つ。

「あれれ、上条ちゃんに黒瀬ちゃん。新聞屋のバイトでも始めたんですねかー？」

「先生、見ての通り緊急事態だ。ちょっとおじやまします」

インテックスの背中の血を指に付けて見せると、小萌先生の顔からさつと血の気が引く。この人は新聞屋以外の人は自分の家に来ないとでも思つてんのか?と和真は疑問を持ちながらも、当麻の後に続いて部屋に入った。当麻の背中にいるインテックスを見ないようにな。

「ちょ、ちょっとー先生困ります!いえそのつ、別に部屋がすごいことになつてるとか、ビールの空き缶が部屋の中に散らばつてるとか、灰皿の煙草が山盛りになつてるとか、そういうことではなくですね」

「先生、当麻はともかく、オレはもう先生のギャップありまくらの生活態度については知つてます」

「い、いや、それはわかってるんですけど」

「当麻に知られるのが問題つてことすか?」

「もうつ、黒瀬ちゃんは先生をからかわいでくださいつ

この年でちやんづけはちょっととくすぐったいよな……と和真は場にそぐわないことを思いながら、直後に悲鳴を上げた子萌先生に田を向ける。どうやらインテックスの傷が田に入つたらしい。和真も見たときは驚いた以上の過剰な反応を示したのだが。

「とうあえずオレはもう部屋から出ます。あんまり他人の出血ものは得意じゃないんで……。後の説明は当麻から シー！」

「ううと、黒瀬ちゃんー？」

部屋をすぐに出、ばたん、ヒドアを閉めて和真は座り込む。

和真は他人の傷や出血を見るのが嫌いだ。いや、嫌いというレベルではなく、もうそれは恐怖に近い意識だった。

おえつ、と和真は吐き気を催しながら、フラッシュバックする記憶を頭から消そうと試みる。

胸部を貫通している鉄柱。

無造作に投げ出された手足。

虚ろな目。

夥しい出血。

ふと落ちていてる小石に、田線をやつた。能力を使つて石を動かそうとするが、石はピクリともしない。唇から出た血だけがぼとり、と石に落ちた。

「…………畜生が…………」

畜生が

翌朝。

和真は小萌先生の家に向かっていた。田的にはもちろん少女の容態の確認である。『ひやら傷は『魔術』とやらで塞がったようだが、昨日の出血量からして体調に変化は無いか、と和真是思ったのでこうして走っている。最初は電話で済ませようと思っていたのだが、当麻の携帯はなぜか繋がらなかつた。

昨日と同じ部屋の前に立つと、中の会話が少し聞こえてくる。これはこの家の主か、と和真是一発で察知する。

『 執行猶予です。先生スーパー行つてご飯のお買い物してくるです。上条ちゃんはその間に何をひつ話をべきか、きつちつかつち整理しておくんですよ？それと、』
『 それと？』
『 先生お買い物に夢中になつてるとわされるかもしません。帰つ

てきたらズルしないで上条ちゃんから話してくれなくっちゃダメなんですかねー?』

それを聞いて和真は安堵の表情を見せる。もつ巻き込まれてしまつた当麻と、微妙な立場の和真と違つて先生は関係のない『一般人』なのだ。できればこれ以上は首をつっこんで欲しくないと和真は思つていた

のだが、その心配は杞憂だつたようだ。

ドアを開けて小萌先生が部屋から出てくる。和真の姿を見て驚いた先生だつたが、すぐに表情を切り替えると先生モードの声で言つた。

「もう、黒瀬ちゃんもあんまり危ない橋ばかり渡つていてはだめなんですよー?先生心配しちゃうんですかー?」

「すいません先生。でもありがとうございます。これからは安全な橋も渡るようにしますよ」

「危ない橋を渡らないっていう選択指は無いんですね?」

それは残念ながら無いです、と和真は笑つた。すこし寂しげな、未練の残る笑いだつた。

小萌先生は和真の顔を見、少し不満そうな顔をしてから135?の体を精一杯動かしアパートの階段を下りていつた。

「・・・いい先生に恵まれたな。オレも当麻も」

そう言つてドアに手をかけた和真だが、中で何か話している声が聞こえてノブを掴んだ手を止める。どうやらあのシスターは喋れるくらいには回復したようだ。そう思つた和真だつたが、次に聞こえた言葉を聞いて思考が止まつた。

『私の抱えているもの、ホントに知りたい?』

ドアを開けようとしていた手も同時に止まる。ぼんやりと彼は、寝起きで上手く働かない頭で思つた。

コレは聞いて大丈夫なのか?

これ以上聞いたら、もう後戻りはできない。少女を見捨てるに罪悪感を感じてしまうし、そんな自分を和真は嫌悪するだろう。もう彼女を救うしか道は残されていない。だが

彼女の抱えているものが、本当に大変なものだつたら?

といひ自分には解決できそつにないものだつたら?

それでも和真は思つ。自分も当麻も彼女を見捨てるとはしないだろつ、と。しかしだからこそその先に待つていてるのが怖い。ハッ喜劇的結末か、悲劇的結末か。二つに一つだ。自分にそれを決められるだけの力があるのか?当麻にはあるのか?もしそれだけの力がなかつたら?

様々な思考が頭の中を渦巻く和真の耳に、当麻の迷いの無い、どこまでも純粹な声が聞こえる。

『なんていうか、それじゃこっちが神父さんみたいだ』

その声を聞いた時点で和真は決めた。いや、決めざるをえなかつた。

「あんのバカ……。もう選択指もないようなもんじゃねえか……」

……迷つてゐこつちがバカみたいだ」

笑いたいよう、泣きたいような顔で和真はドア越しに一人の会話を聞き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0692ba/>

とある科学の磁気单極《モノポール》

2012年1月5日18時49分発行